

三軒茶屋駅周辺まちづくりシンポジウム記録

■時間 2019年12月22日(日)13:00-16:00

■場所 昭和女子大学 学園本部館3階 大会議室

➤ 及川氏基調講演「メディアの視点から見た“三茶”のまちの魅力と課題」

☆ 東京について

- 東京は大企業の集積、高度技能の分業、選択肢が多いという側面がある。一つの都市というよりも、もはや一つの経済システムとも呼べる。
- 一方で、これからは居場所としての、住む人間にとっての東京を考える時代に来ている。「東京ステイ」というプロジェクトでは、これまでと違ったアプローチで東京を考え、自分の感覚を呼び覚まそうという活動が行われている。居場所としての東京を捉え直すことは、まちづくりの一つの出発点といえる。
- 経済的な合理性とは違う、人と人との触れ合い、楽しさなどが求められてきているのではないかという実感がある。このような「東京ローカル」という感性をどうつくれるかを考えている。
- colocal という雑誌で関与しているプロジェクトに「江古田キャンバスプロジェクト」がある。学生が、大学に行くという目的とは違うまちの歩き方を探し、発信しようというものである。きっかけは、「大学生は従来よりもまちに入り込んでいない」「卒業とともにまちとのかかわりが失われてしまう」という課題感であった。このようなプロジェクトは、東京ローカルの課題の解決手法として色々なところで始まっている。

☆ 三軒茶屋について

- マガジンハウスが三軒茶屋について取り上げた雑誌のタイトルを振り返ってみると、80~90年代は「一人暮らししやすい」「お金がなくても暮らせる」「リーズナブル」「程よい賑わい」といったタイトルが並んでいた。00~10年代は「こじんまり系」「下町っぽさとおしゃれさ」「飲み屋の魅力」「路地のまち」「ずっとここにいたい」といったタイトルが並んでいる。こうした面が三軒茶屋の個性、競合優位性と言えるのではないか。
- その中でも「路地のまち」がキーワードになると考える。ビル、建物が建設され、新しく作られるまちでは、利便性はあるが、どこかよそよそしかったり、距離感を感じる。その中で「路地のまち」の近しさ、多様性、混在感は、三軒茶屋にとってキーワードになるのではないか。

- 古くなった部分を取り壊して新しいものにしていけば良いという発想ではなく、良さを大事にしながら新しいデザインをしていく視点がこれからは必要になるのではないか。たとえば台湾・台南は、従来の屋台や路地の雑然とした感じなど、今ある雰囲気や歴史を大事にしながらリノベーションしている。新旧が共存していくようなまちのデザイン、発想も良いと感じる。

☆ まとめ

- まちと人の関係性は時代により変わるが、現代はまちとの交感・交換（シェア）が求められる時代になってきているのではないか。
- まちや地域は、限られたキャパシティの中で持続可能性をいかに確保していくかが重要であり、参入障壁の低さによるスタートアップのチャンスが多いといった特徴がある。そういった意味では、まちや地域にこそ可能性があり、新しい選択肢が生まれてきている。
- 国内外の事例をみると、新しい価値、新しいことが起こっている場所に関心を示す人は多い。その中で、ホストとお客さん、与える人と与えられる人という関係性を超え、みんなでつくっていこうという意識が強くなってきている。これからのまち、特に三軒茶屋でこうした動きが起き、あるものを生かしながら多様な人が参加するデザインができると、非常に面白いまちになるのではないか。

以 上